

---

## 若狭湾沿岸低地の完新世木材化石群

Holocene Fossil Wood Assemblages and Wooden Artifacts in the Lowland along the Wakasa Bay

植田弥生

【要旨】若狭湾沿岸には著明な鳥浜貝塚をはじめ多くの低湿地遺跡が分布しており、縄文時代以降の自然木や木製品が多数出土し、これらの樹種同定調査がなされてきた。小論では今までに調査された木材化石群の資料をもとに、各時期の古植生と木材利用の関係を検討した。当地域ではスギ材が豊富に利用されているが、縄文時代の全時期ではそれほど多くなく、弥生時代以降に急速に増加した。縄文時代草創期以前から前期は、トネリコ属が優占する冷温帯性の落葉広葉樹林が復元されており、加工木にもトネリコ属が最も多く利用されていた。しかしこの時期のトネリコ属の利用率は10%前後であり、スギを含め多種多様な樹種が利用されており、加工木の使用樹種と復元植生の構成種とは関連性が高かった。縄文時代中期～後期および晩期になると、埋没林の調査から低地にスギが分布拡大し大径木からなるスギ林が成立し、山地斜面にはアカガシ亜属やシノキ属などの照葉樹林要素が拡大し、暖温帯性の森林に変化した。しかしスギが増加してもこの時期の加工木にスギが占める割合は前時期と同様に低く、多種多様な樹種が利用されていた。但し、丸木舟はスギに限られている。そして弥生時代中期以降になると加工木に占めるスギの割合はそれ以前は30%以下であったのが一気に85%を占めるようになる。ところがこの時期の堆積層は草本質泥炭に急変しており、それ以前に低地一帯に成立していたスギ林は消滅し低地縁辺に縮小していた。そして古墳時代以降もスギ材利用が圧倒的に多い点では弥生時代と同様であるが、徐々にヒノキ材の割合が増加する傾向が見られる。縄文時代前期以前までは植生変化がすぐに木材利用に現れていたが、縄文時代中期から後期・晩期と弥生時代を境に、植生と木材利用には時間的差が見られ、大きな地史的イベントや加工技術や樹種利用の嗜好などの要素が関わっているようであり、この点の解明は今後の課題である。

### 1. はじめに

若狭湾沿岸には著名な鳥浜貝塚をはじめ多くの低湿地遺跡が分布し、縄文時代以降の泥炭質および泥炭層からは自然木や木製品が多数出土している。当地域では、遺跡発掘に伴い出土した自然木と木製品の樹種調査が積極的に行われ、各時期の古植生や木材利用を明らかにする資料の蓄積がなされてきている。その結果、古植生におけるスギの消長と木製品のスギ材利用率との間には密接な関係があることが明らかになってきた。当地域では縄文時代草創期以前からスギ材が利用されているが、縄文時代は複数の落葉広葉樹も利用されておりスギはそれほど多くはなかった。しかし弥生時代～古墳時代には木製品に占めるスギ材は80%を越え、スギ材中心の木材利用となる。そして奈良・平安時代になるとスギ材の利用率は減少し、その反面ヒノキの使用が増えることが指摘されている（鈴木・能城, 1990, 1991）。一方、古植生にもいくつかの変化期が認められている。明瞭な変化期のひとつは縄文時代早期から前期の移行期であり、急速に照葉樹林要素の種類数と出土点数が増加し、早期以前に優占していたブナ属などの冷温帯林要素が減少する。もうひとつのおおきな変化期は、縄文時代後期から弥生時代に低地にスギが拡大しハンノキ亜属やトネリコ属と共に湿地